

跡見学園女子大学短大 村田 あが

目的： 江戸時代後期の家相文献における建築儀礼に関する記述を分析することにより、当時の住まい普請の状況と、著者である家相相者の普請への係わり方や仕事内容を明らかにする。また、同時期の建築儀礼書との比較を通して、家相文献の位置付けについて検討することを目的とする。

方法： 江戸時代後期に畿内で活躍した家相流派の始祖松浦東鷄の記した家相文献『方鑑精義大成』（享和2年自序、同4年刊行）の建築儀礼に関する項目を中心に分析し、同じ著者による建築儀礼書、および同時代の建築儀礼に関する記述との比較検討をする。

結論： 『方鑑精義大成』は、家相判断における暦の役割を重視したものである点において、著者ら松浦派の一般的な家相文献の構成とは異なる。昨年度の報告で分析の対象とした『匠家故実録』も同じ著者による同時期の文献であるが、『匠家…』は建築儀礼を執り行う棟梁のために書かれたものであり、本書は普請の施主に向けて書かれている。建築儀礼の内容は「地造」、「鋤初め」、「新初め」のみが記されるが、儀礼の具体的な作法への言及は少なく、暦との関連上注意する事項について指示する点が特徴である。特に施主の生年による暦上の「塞がり」の年に普請する場合の対処の仕方を細かく指示し、「普請注連縄」による解決法を述べている。これは前出の『匠家…』には見られない記述であり、『方鑑…』が施主の側の便宜を計ることを専一とした書であることが分かる。建築儀礼の項目には方位に関する言及が少なく、暦との関連において施主が心がける必要があることのみを扱う点が明らかであり、住まいづくりの実際的な教則本として用いられたと推測される。